

つまり、簡単に云えば、戦前の〈プロレタリア詩〉や、戦後いつときいわれた〈宣伝煽動の詩〉、その他〈人民詩〉とか〈抵抗詩〉と呼ばれるものを、どのように問題とした上で、いまあなたのそのような詩は書かれているのかである。

それを、できれば多くのこの詩集の感想としてききたいとねがう。

末尾に付して

秋山 清

素朴に形容すれば、向井君の詩は抒情詩である。それも、なるほど、現在のあまりな世相の中に注目されながら、誰も抒情詩だなどと思ってもせぬ言いもせぬ時に、ああ、これは抒情詩であつたかとはかりのものである。まさしく現在の中に屹立しながら、そうと誰が理解してゐるだろうか。

このたびこの詩集の刊行に当って、そういつてそれが抒情詩であることに気がついて貰えば、私が改めてペンを探ることはもうないといつていい。「向井の抒情詩」というそのことに、ぼくらの仲間のコスモス同人たちといえどもあまり気がついていないかもしれない。そこで私は、この一言を吹聴すれば役目をおわつたといつてもいい。

いいかえればその詩を抒情といわず戦後四十年近くもかきつづけ
て来たそのことを、何か見直す思いだが、それはいま次第に私の中
に存在しつづけるものである。

五、六年以前に『アナキズム文学史』（続）を発表したとき、その
冒頭に「イオムの（詩の）方法」という理解をそこにかいている。

大づかみにいって『イオム』の方法は写実的といえるだろう。し
かしその詩が抒情だということが注目されるのである。これはもつ
とも初歩的表現においてはナイーブなど言わねばならぬものである。
それを以って向井は、今日まで自分を歩いて来ている。さらに未来
に向けて自分を前進させようとしている、かに見える。

向井が、あるいは『イオム』が、この方法をとるかぎり追及され
るのは抒情そのものである。そこを独断を以って私はこう截断した
い。『イオム』の詩を、プロレタリア詩の方法と並べて、たたかう
詩としての「イオム」の特殊性をはっきりさせたいことである。

アナキストの文学活動として、戦後もつとも異彩を放った（現在
もそれは文学の流域から社会活動にまでひろがって、より幅ひろい、
影響を与えつつある）のはガリ版の詩誌『イオム』における小人数の
活澆であった。現在それは文学または詩の世界から、反戦と平和の
運動に特殊な力を示しているが、しかしなお、それは文学の域から
去っているのではない。

こう私が語るのは、プロレタリア詩（マルキシズム文学運動の
一つ）との深いちがいを明瞭にしたい、しなければならぬ、と考
えたことである。彼らの詩の活動を戦後四十年の文学の中で考える
時、こんな特長が見える。

第一にプロレット・カルトといわれたあのイデオロギッシュな活
動とは異なるところ。文学運動としてプロ文学はたたかわれたが、
はげしくいえば文学といわれながら本質はむしろ政治であった。『
イオム』は文学、どこまで行っても文学と政治のそれぞれに、それ

ぞれの責任を持たせている。この分れ目は大切。

今、さびしい呼吸がわたし達の胸に

そよいでいる

二人は手を取り合って

年月が過ぎて

ゆくのを見ていた

(イオム同盟詩集)

プロレタリア詩とこの詩は、戦中戦後においても強く対立せざるを得ない。このような胸のそよぎが詩になることがそれを証明する。「個人の強調ということが社会の無視とはならず、社会の尊重ということが個人の抹殺ということと結びつかない。」これは「イオム同盟」の山口英の言葉を私が要約したものである。個が社会活動に優先されねばならぬという風に信じてしまわないところに立つ生き方は、いつそうむずかしいが、この対立のやりとりのまに、抒情詩と

して在るべき詩が、あるいはやさしい抒情として書かれて不思議のないものが、自分を棄ててしまう。

「イオム」あるいは向井孝も写真に努力することで、自分らの作品を抒情詩から遠ざかろうと考えたのではなかったか。

一九五九年九月に向井は、コスモス社から出した『イオム同盟詩集』のあとがきの一つ「イオミズムの形成」の中でこうかいている。

われわれは多くをなし得なかったかわりに処女地を発見した。うたうことからえがくことを、感情の表現だけではなく感動の主体をつたえることを。行為の前に考え、正しく判断する方法をひろめる場がのこされている。

たいへん好きな言葉であるが、私は必ずしもそのまま受とめない、がそれでいいだろうか。それは『イオム』の詩が向井がかつて言ったように処女地を発見したのではなく、うたうことと描くことに

も、新しい道を見つけたのだとまでは私を安心させない。しかし何を見つけたのかというよりも、如何に活動するか、活動の主体は吾にあり、という自覚を、実践するということにおいて、彼は自分の歩く道が、ひろく新しく見渡せたのではないか。

向井孝が今何を活動しているかについて私は知るところがない。自分の道を拓いて、自分が先頭に立って、進んでいることを私は想像し、その想像を信用していることを都合よく私は信じている。この道も私にとつてはこの上ない抒情の道である。

第二次世界戦争の前夜に私たち少数の者が歩いてきた道も、そこから何かを得られ、そこから何処へつながら、道かということとはつきり見当のつくものはなかった。かなしい程頼りない自分にたよっていた。

何もなかったからである。自分がどこを向いて歩んでいるかさえ不十分なままに、なお何も確信に値しない道を、歩こうとすることで、

毎日のささやかな思いを抱いていた。絶望とは同じでなかった、というだけのことであった。それは自分が何を捉えようとしてるのか、についての開けた眼もなかったから、わずかに絶望の隣に自分は置かれていたのであった。

その時私らには写真だけがあつた。写真する思いにすがりつくのが一生懸命といつてもよかつただろう。その思いは抒情とさえもい得るものではなかった。驚きもかなしみも不安も、写真する積極さの何れとも異なる中に立っていた。

そのぎりぎりのとき「敵は新型バクダンを投下せり」という正体不安のニュースが来た。それから数日でガタピシになった。ぼくは一切の文学の方法が見えなくなった。後輩のイオムの諸君と出逢つたのは二ヶ年後だったが、あの時私らはわずかな現実的な現実を描き、数年後の「イオム」は処女地として、うたう抒情詩でなく、うたうことえがくことをとらえはじめていた。この時間的落差は改めて認識されよう。

私は今、向井といえども方法として抒情に在り、われも亦然り、われらの仲間皆然りとこの結論に達し、そこから次の道を自分に期したいとしている。

「末尾に付して」が長すぎた。わが向井の努力と活動といえども詩はついに抒情か。その反対に、現実の中に自己を酷使する者の心情は、ゆるめるを必要とするのか。

(一九八三・八・一)

☆本詩集の感想などお送り下さい。個人紙〈イオム通信〉や、WRIが出している〈非暴力直接行動〉をお送りします。

(大山市鶴岡町六六六又はWRI事務所内)

向井 孝

向井孝小詩集

ミ ビラについて

発行 WRI-JAPAN 出版部

水田 ふう

大阪市阿倍野区旭町2-12-2

1983年10月4日

定価 1200円